広島大学大学院教育学研究科 音楽文化教育学研究紀要 XXI 2009. 3. 22

米国の音楽科教科書 *Silver Burdett Making Music*（2008）における指導内容の分析

－「発想」要素に注目して－

矢 野 沙 織
（本講座大学院博士課程前期在学）

Ⅰ はじめに

教育の現場で教科の指導を行うにあたっては，指導内容に系統性をもたせ，子どもの発達段階に応じた指導を行うことが必要である。米国の音楽科教科書は詳細な指導内容の記述に重点を置いた編集がなされており，教師用指導書だけでなく，児童用教科書にも，各レッスンで注目すべき要素が明記されている。

米国の音楽科教科書に見られる学習内容の系統性に関する研究として，本間（1985）が挙げられる。本間は，*Making Music Your Own*（Silver Burdett, 1964）に見られる学習の系統性を，リズム指導に注目して分析した。その結果，*Making Music Your Own* に見られる学習計画は「能率的で学習内容に系統性を持たせやすく，また各学習事項に関して多面的なアプローチができるので，児童にその学習で培われた能力を定着させやすい」[1] と述べている。しかし，この研究の対象とされている *Making Music Your Own* は1960年代から1970年代前半に使われていた教科書であるため，現在アメリカで使用されている教科書シリーズに関する検討が必要である。

本稿は，米国を代表する音楽科教科書として *Silver Burdett Making Music*（2008）（以下，*Making Music*）を取り上げ[2]，指導内容の系統性を明らかにすることを目的とする。*Making Music* は，米国国内で大きなシェアを占めており，米国における2大音楽科教科書として位置づけられるものである。

Ⅱ 研究の方法

研究の遂行に際して，本稿ではまず研究の対象を限定する。*Making Music* は Pre-K から Grade-8 まで一連のシリーズとして編集されているが，Grade-K から Grade-6 と，Pre-K ・Grade-7・Grade-8 の教科書の構成には明らかな差異が見られる。そのため，本稿の研究対象は，日本の初等教育段階に当たる Grade-K から Grade-6 までとする。

具体的な分析方法としては，まず *Making Music* の Grade-K から Grade-6 の各ユニットを構成する個々のレッスンを「発想（expression）」，「リズム（rhythm）」，「形式（form）」，「旋律（melody）」，「音色（timbre）」，「テクスチュアと和声（texture and harmony）」の6つの要素に分類する[3]。その中から「発想」要素に注目し，これをさらに複数の項目に細分化した上でそれぞれの系統性について考察していく。

Ⅲ 「発想」要素の指導内容

「発想」要素は，「強弱（dynamics）」，「テンポ（tempo）」，「アーティキュレーション（articulation）」，「雰囲気（mood）」の4つの項目に分けられる。本稿で取り扱うレッスン数は，表1に示すとおりである。以下，各レッスンにおける活動内容をもとに，それぞれの項目の指導内容を概観する。

表 1 「発想」要素における各項目のレッスン数

項目＼Grade	K	1	2	3	4	5	6	合計
強弱	6	8	6	7	3	1	5	36
テンポ	8	6	2	5	3	3	5	32
アーティキュレーション	1	1	4	1	2	1	3	13
雰囲気	3	0	0	0	0	0	0	3
合計	18	15	12	13	8	5	13	84

(1)「強弱」の指導内容

表 2 「強弱」の指導内容分類（抜粋）

レッスン*			タイトル	①感じ取る／聴き取る	②表現する	③理解する
K	1	1／12	季節から季節への"にぎやかなもの"と"静かなもの"	・にぎやかな音と静かな音のいくつかの例を聴いて，その特徴を述べる。 ・写真に対応した音を聴いて，それがにぎやかなのか静かなのか答える。 ・それぞれの季節の"にぎやかな音"と"静かな音"を聴く。	・録音の"にぎやかな音"と"静かな音"に合わせて歌う。	
1	5	1／12	だんだんにぎやかに，だんだん静かに	・音楽の種類と強弱を説明する。 ・強弱の変化を説明する。 ・曲中の楽器の音，強弱とテンポの変化，高音の楽器（ピッコロ）に注目して曲を聴く。	・楽器を演奏するふりをし，教師の朗読の強弱に動きを合わせる。 ・詩に強弱をつけて朗読する。	・"強弱"という言葉を知る。 ・近くの音はにぎやかで，遠くの音は静かであるということを理解する。
2	4	1／12	天気の表現	・音楽を聴き，曲中の強弱の変化を聴きとる。 ・リスニングマップを使って，自分が思っていた強弱と一致していたかどうか話し合う。	・どこで crescendo が出てきたか注目し，crescendo に特別な注意を向けながらもう 1 度歌う。 ・強弱を使って，創作した旋律を演奏し，パートナーの子どもに自分が作った旋律を教える。 ・旋律に合わせた伴奏（旋律の強弱を反映する）を創作する。 ・静かな音やにぎやかな音，accent, crescendo を使って，ことわざを朗読する方法を考える。	・"crescendo"という用語の定義を知る。
3	1	1／12	強弱の動き	・音楽を聴いて，どんな強弱が使われているか説明する。また，その強弱が採用された理由を説明する。 ・2 つの曲の強弱を比較する。	・強弱記号に細心の注意を払いながら歌う。 ・動きの強弱を使って，録音に合わせて動く。 ・歌の強弱を反映した動きを，パートナーと一緒に作る。 ・知っている歌を歌うときに，強弱を体の動きで表現しながら歌う。	・歌に使われている強弱記号を理解する。 ・mf と mp が意味するものを説明する。 ・強弱が音楽に与える影響について説明する。 ・p, mp, f, mf について復習する。 ・これらの強弱に関する用語を認識し，使用する。 ・楽譜の中の強弱記号を認識する。
4	8	6／11	桜の花のとき		・録音に合わせて，強弱を使って表情豊かに歌う。 ・緩やかな crescendo によって強弱を表現する。 ・フレーズの最後になめらかな decrescendo を配置することによって，正しいフレージングを達成する。	・crescendo と decrescendo の記号と用語の意味を話し合う。
5	3	1／12	誇りを表現しよう	・音楽を聴き，曲中の強弱に注意を払う。 ・前奏で聴こえた強弱を説明する。	・選んだ強弱に注意しながら歌を歌う。 ・crescendo, decrescendo, 3 つのアーティキュレーションを指揮するときに自分が使うであろう動きを実演する。 ・自分が使おうと思う強弱を選んで説明する。	・強弱に関する記号と用語について話し合う。 ・リスニングマップを使って，強弱の記号と用語を認識する。
6	3	1／12	強弱は音楽に生命を与える	・強弱に注意を払って，音楽を聴く。 ・強弱の変化を説明する。 ・録音を聴き，曲中の強弱の変化を理解する。 ・強弱のカードを作り，聴取したときに聴こえた強弱や強弱の変化をふさわしいカードで表す。 ・楽譜のどこで強弱の変化が起こるか指摘する。 ・強弱を表す音楽用語を使って，他のグループの演奏における強弱の変化を認識する。	・楽譜に書かれている強弱を正しく表現することを念頭において歌う。 ・録音に合わせて強弱を変化させながら歌う。 ・グループで crescendo, decrescendo, sforzando を使った短いリズミックな曲を作って記譜する。	・近くの音はうるさく聴こえ，遠くの音は静かに聴こえることを理解する。 ・強弱の変化は，音楽に表現の特質を与えることを理解する。 ・強弱の変化は，急激に起こすこともできるし，緩やかに起こすこともできるということを理解する。 ・教科書の楽譜に使われている強弱記号を認識する。 ・強弱を記譜するための基本的な記号を使う。 ・crescendo と decrescendo をあらわす音楽記号に注意する。 ・sforzando の記譜法を知る。

*枠内左から学年・ユニット番号・レッスン番号／ユニット内の総レッスン数。以下，表 3 から表 5 についても同じ。

「強弱」では，"にぎやかな音"と"静かな音"を認識することから学習が開始される。Grade-K では，"にぎやかな音"と"静かな音"（音楽に限らず，環境音なども含む）の聴取や，エコーに関する学習が行われる。さらに，強弱が音楽の表現に与える効果を学ぶ第一歩として，子守歌とマーチを用いた強弱の比較も行われる。Grade-K においては，強弱に関する用語や記号の指導は取り入れられていない。

Grade-1 では，"にぎやかな音"と"静かな音"の認識および比較に加え，音楽表現における強弱の効果や，

強弱の変化（「だんだんにぎやかになる」，「だんだん静かになる」など）に関する学習が取り入れられている。また，「強弱」という語の定義を学んだり，音楽用語を使って強弱の変化を説明したりする活動が行われ，Grade-K で主に体験をとおして学んだ事項を知識として定着させようとする意図が見られる。

Grade-2 では，crescendo と decrescendo が中心的な学習内容とされている。単に定義を教え，模倣させるだけではなく，音楽を表情豊かに演奏するための効果的な表現方法[4]も指導される。

Grade-3 では，強弱に関する用語に加え，強弱記号に焦点があてられる。Grade-2 までの学習では，録音を聴いて，聴きとった強弱の変化を説明する活動が主であったが，Grade-3 においては，楽譜に示された強弱記号を認識する活動が新出する。また，mf と mp は Grade-3 で初めて指導される。

Grade-4 および Grade-5 では，新出の指導事項は見られず，Grade-3 までで学習した事項を表現活動に生かすことが重視されている。

Grade-6 では，subito piano や sforzando といった，急激な強弱の変化に関する事項が指導される。また，Grade-5 までの学習内容の復習が多数見られることから，学習内容の定着が図られていることがわかる。

以上，「強弱」の指導内容を概観した結果，次のような学習の流れが見られることが明らかとなった（図 1）。

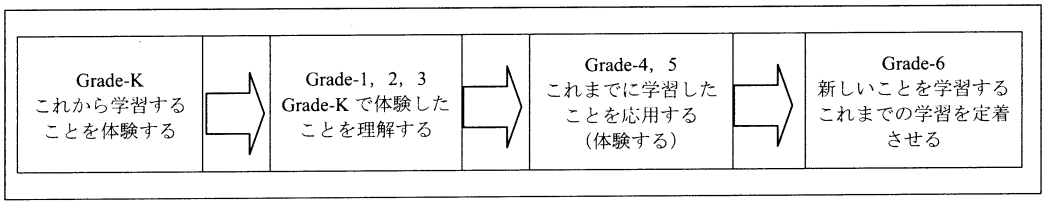

図 1　「強弱」に見られる学習の流れ

「強弱」の活動内容を，①感じ取る／聴き取る活動，②表現する活動，③理解する活動，の 3 つ（以下，順に活動①，活動②，活動③とする）に分類し，それぞれの占める割合を図 2 に示した。さらに，活動②の内容を身体的表現活動（ダンス，強弱を身体で表現する活動など）と音楽的表現活動（歌唱，器楽演奏など）とに分類し，それぞれの占める割合を図 3 に示した。

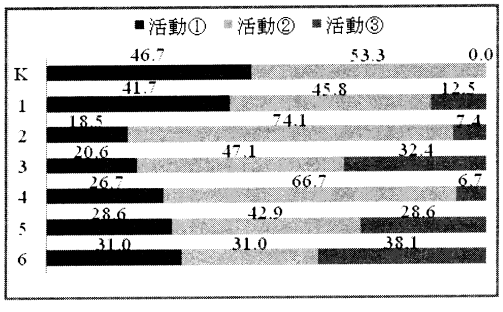

図 2　「強弱」の活動内容における活動①，活動②，活動③の占める割合

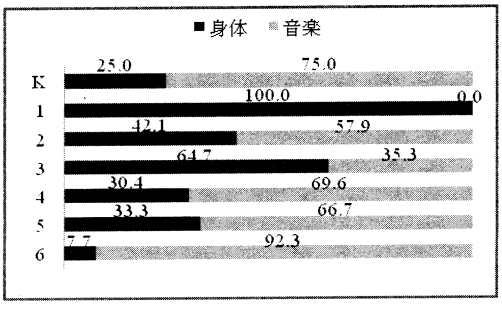

図 3　「強弱」の活動②における身体的表現活動と音楽的表現活動の割合

「体験したことを理解する」段階にあたる Grade-1，Grade-2，Grade-3 では，身体的表現活動が重視されていることがわかる。また，Grade-1 では活動①と活動②が占める割合に大きな差はなく，Grade-2 では活動②が主となり，Grade-3 では活動③が増えていることから，「体験したことを理解する」段階では“聴取→表現→理解”という流れが見られるといえる。

「学習したことを応用する」段階にあたる Grade-4 と Grade-5 では，活動②の多くが音楽的表現活動にあてられている。また，Grade-4 では活動②が多く見られ，学習したことを音楽表現に生かすことが重視されている一方，Grade-5 では音楽表現に生かすだけでなく，学習したことをもとにした話し合い等も行われている。

「新しいことを学習する・これまでの学習を定着させる」段階に当たる Grade-6 では，活動①と活動②の両方をバランスよく取り入れることでこれまでの学習を復習するとともに，新出事項の理解にも重きがおかれている。

(2)「テンポ」の指導内容

表 3 「テンポ」の指導内容分類（抜粋）

レッスン			タイトル	①感じ取る／聴き取る	②表現する	③理解する
K	3	1／12	速いか遅いか，さあ行こう！	・録音を聴き，その中に示された動きを聴き取り，それぞれの動きの速度を説明する。 ・拍打ちをしながら録音を聴き，その音楽が速いか遅いか判断する。	・歩行の速さ，ゆっくりの速さ，走る速さの拍に合わせて動く。 ・録音に合わせて拍打ちをする。 ・様々なテンポで，動いたり，楽器の即興演奏をしたりする。	
1	2	1／12	速いか遅いか？	・音楽を聴き，テンポの変化を説明する。 ・音楽を聴きながら拍打ちをし，テンポの変化を感じ取る。 ・音楽が何を表しているのか，示している物を答える（テンポの変化，楽器の音など）。 ・音楽を聴き，テンポの変化を聴き取る。 ・絵を見て，絵の中の動くものを認識し，それらが動く速さをそれぞれ答える。	・素早く，また，ゆっくり動く動物や物を認識し，それのまねをして動く。 ・教師の太鼓の拍の速さに合わせて動く。 ・だんだん速く動くものを認識し，それのまねをして動く。 ・だんだん遅く動くものを認識し，それのまねをして動く。 ・音楽を聴きながら拍打ちをする。 ・数人で列車を作り，列車の動きを再現する（速度を変化させる）。	・“テンポ”という語の定義を学ぶ。
2	2	1／12	速くなる，遅くなる	・絵を見て，その絵がどのようにして動きやテンポを表しているのか説明する。	・教師が演奏するドラムの拍に合わせて，部屋中を歩きまわる。 ・絵を見て，絵の中の人影のように動く。 ・絵を見て，絵の中の人影のように，パートナーと一緒に動く。 ・音楽を聴きながら拍打ちをし，音楽のテンポの変化に合わせて拍打ちの速度を変化させる。 ・テンポの変化を正確にしながら，歌を歌う。	・“テンポ”の定義を学ぶ。
3	2	1／12	自由への列車	・リスニングマップを見ながら音楽を聴き，テンポの変化を感じ取る。	・adagio から allegro になって，また戻る簡単なオスティナートを手拍子し，変化するときのテンポを認識する。 ・歌の前奏とコーダを創作する（accel. と rit. を使う）。 ・教師がテンポの記号を指し示したときに，適切なテンポでオスティナートを手拍子する。	・テンポに関する用語（adagio, moderato, allegro, accel., rit.）を学ぶ。 ・メトロノームで示されたテンポを表す語をそれぞれ答える。
4	5	1／12	テンポに合わせてボートを漕ごう	・音楽を聴いてテンポの変化を聴き取り，イタリア語の用語を使って説明する。 ・テンポの変化が，上演にどのような影響を与えるか説明する。	・詩の朗読のテンポに合わせて，太鼓で正確に拍打ちをする。 ・様々なテンポで伴奏パートとスピーチ作品の朗読とを交替で演奏する。 ・黒板に書かれた文章を，様々なテンポで読む。 ・様々なテンポで詩を朗読する。	・テンポの用語と記号を，認識し，定義する。
5	6	1／12	ロックしよう！	・この曲のどのような特質が，ダンスに合っているか答える（テンポ）。	・遅いテンポで歌を歌う。	・テンポが曲にどのような影響を与えるか認識する。 ・テンポを表す用語を認識する。
6	4	1／12	あなたの時間を使って	・聴いた音楽のテンポを説明する。 ・聴いた音楽のテンポを，音楽用語を使って説明する。 ・テンポを変化させたとき，音楽の表現がどのように変化したか説明する。	・録音に合わせて歌いながら拍打ちをする。	・時計の針に注目し，1 分間に 60 拍の速さを認識する。 ・M.M.（メトロノーム速度）について学ぶ。 ・“テンポ”の定義を学ぶ。 ・音楽用語の図の中から，教師が示すテンポを表す語を選ぶ。 ・テンポや表現の特質を説明する用語には，イタリア語が使われるということを学ぶ。

Grade-K におけるほとんどの学習活動は，子どもの生活と密接に関係したものになっている。他の項目と比較すると，イメージする活動や様々な事物の模倣を行う活動の占める割合が高い。またここでも，“速く動くもの”と“遅く動くもの”を認識することから学習が開始されており，両極端な事象から学習を始めるという流れは「強弱」の指導と共通していることであるとわかる。

Grade-1 および Grade-2 では，「テンポ」という語の定義を学ぶとともに，録音を聴いて，聴きとったテンポやテンポの変化を説明する活動が多く行われている。表現活動に関しては，音楽のテンポに合わせて身体を動かす活動が多く見られる。テンポを表す用語はまだ指導されず，Grade-1 と Grade-2 における活動は，Grade-K の学習の延長として今後の学習内容を体験することに重きがおかれている。

テンポを表す用語の多く（adagio，moderato，allegro，accelerando，ritardando）は，Grade-3 で指導される。その他，subito の定義を学んだり，音楽用語を使って聴きとったテンポを説明したりする活動が行われるなど，Grade-2 までの学習で主に体験をとおして学習した事項を知識として定着させようとしていることがわかる。さらに，適切なテンポを使って表現する活動も含まれている。また，Grade-4 での活動内容は Grade-3 の活動内容からほとんど変化していない。このことから，Grade-3 と Grade-4 の 2 年間で，「テンポ」に関する基礎的な内容の確実な定着が図られているといえる。

Grade-5 では，音楽の表現に対してテンポの変化が与える効果に関する学習が多く見られる。テンポの変化が及ぼす効果に関する学習は，低学年にはあまり見られず，応用的な学習として位置づけられていることがわかる。

Grade-6 では，メトロノームの速度に関する学習や，様々なテンポを指揮する活動が取り入れられている。テンポの用語に関する学習や，テンポの変化が及ぼす効果に関する学習も繰り返されており，新出の事項を指導するだけでなく，これまでの学習内容の定着が図られていることがわかる。

以上，「テンポ」の指導内容を概観した結果，次のような学習の流れが見られることが明らかになった（図 4）。

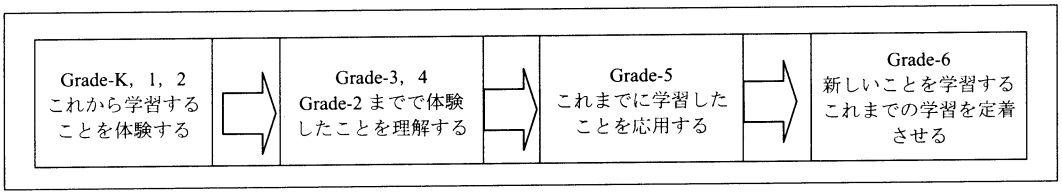

図 4　「テンポ」に見られる学習の流れ

「テンポ」の活動内容を，活動①，活動②，活動③に分類し，それぞれの占める割合を図 5 に示した。さらに，活動②の内容を身体的表現活動と音楽的表現活動とに分類し，それぞれの占める割合を図 6 に示した。

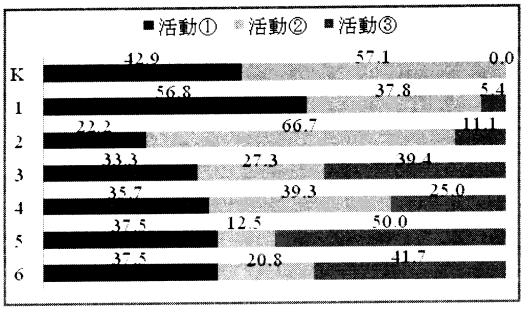

図 5　「テンポ」の活動内容における活動①，活動②，活動③の占める割合

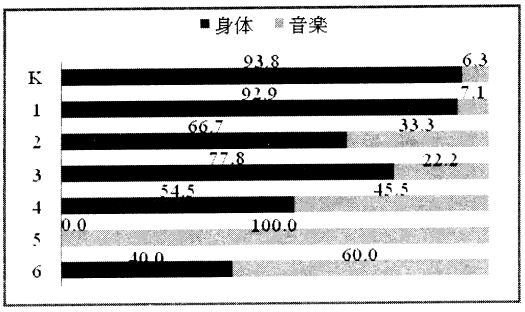

図 6　「テンポ」の活動②における身体的表現活動と音楽的表現活動の割合

低学年の活動内容には特に，身体的表現活動が非常に多くなっている。「テンポ」においては，「強弱」以上に日常における経験から音楽の学習へと移行させることが重視されていると考えられる。

「体験したことを理解する」段階にあたる Grade-3 と Grade-4 に注目すると，Grade-3 では活動③の占める割合が Grade-2 までと比べて目立って大きくなっており，Grade-4 で再び活動②の占める割合が大きくなっている。つまり，理解したことを表現することで，より理解を深めることが意図されているといえる。

「学習したことを応用する」段階にあたる Grade-5 では，活動③が全活動の半数を占めている。ここでも「強弱」の Grade-5 と同様に，学習したことを使って話し合いをする活動が多く見られる。また，活動②が占める割合は少ないが，活動②の全てが音楽的表現活動にあてられている。つまり Grade-5 では，学習したことを使って話し合いをする活動が主であるが，学習したことを音楽表現に生かす活動も行われていることがわかる。

「新しいことを学習する・これまでの学習を定着させる」段階にあたる Grade-6 では，活動①や活動②をとおしてこれまでの学習を復習し，定着を図る一方で，新しい事項の学習も取り入れられている。

(3)「アーティキュレーション」の指導内容

表 4　「アーティキュレーション」の指導内容分類（抜粋）

レッスン			タイトル	①感じ取る／聴き取る	②表現する	③理解する
K	7	1／12	したたり，点，線，斑点		・腕，頭，肘，足を絵筆のように使って，音楽に合わせて空中に長い線を描く。 ・想像上のキャンバスに，点や線を描くために，全身を使って動く。	
1	6	1／12	レガートかスタッカートか	・音楽を聴き，legato が演奏されているか staccato が演奏されているか判断する。	・音楽を聴き，legato や staccato を表すために手の動きを使う。	・“legato” の定義を学ぶ。 ・“staccato” の定義を学ぶ。 ・これらの基本的な音楽用語（legato と staccato）を自分の言葉で定義する。
2	3	1／12	アクセント	・スピーチ作品を聴いて，どこに accent が使われていたか説明する。	・スピーチ作品に使われている，動きを表す語を認識し，その動きを再現する（accent を表現すること）。	・“accent” の定義を学ぶ。 ・美術では，accent がどのように使われるか学ぶ。
3	3	1／12	跳躍と滑走	・staccato と legato の2つの音のタイプを，音楽を聴きながら認識する（何の楽器がどちらの種類の音を演奏しているか答える）。 ・staccato と legato の違いを判断する。 ・アーティキュレーションに注意を払いながら，音楽を聴く。 ・リスニングマップを使って，歌の各部分のアーティキュレーションを説明する。 ・2 つの絵を見て，どちらが legato でどちらが staccato を表しているか説明する。	・同じ歌を，staccato と legato の両方で歌う。	
4	6	1／12	自由の上のアクセント	・音楽を聴き，accent の付いた音を発見する。 ・クラスメイトの演奏を聴き，どの音に accent が付いていたか判断する。 ・雷と稲妻の効果を表すために，自分ならどんな楽器を使うか説明する。 ・音楽を聴きながら，accent の付いた音が聴こえたら手を挙げる。 ・accent を作っていた楽器は何か答える。	・録音に合わせて，accent を適切に反映して歌う。 ・独自の accent 記号を考案する。 ・リズム楽器で，前奏とコーダを創作する（accent を使うこと）。 ・歌に使われているリズムを，accent の位置を変化させてリズム楽器で演奏する。 ・少人数のグループで，accent が使われている絵を表現する詩を創作する。	・音楽における accent の定義を学ぶ。 ・accent 記号を学ぶ。 ・楽譜の中の accent を発見する。 ・言葉における accent について学ぶ。 ・絵を見て，美術における accent を学ぶ
5	5	1／12	表現は飛んでゆく	・曲中で slur が使われている部分を認識する。 ・リスニングマップを目で追いながら音楽を聴き，accent の位置を認識する。	・録音に合わせて歌う。 ・ソプラノリコーダーで，staccato と legato の奏法を練習する。	・tie と slur の定義を学ぶ。 ・アーティキュレーションを表す用語を認識する。 ・accent に関する情報を学ぶ。
6	12	13／13	愛国的な歌	・slur なしの演奏と slur ありの演奏を比較する。	・slur なしと slur ありの両方で歌う。	・slur の最初の音はわずかに強調して，最後の音はやや静かに歌うということを理解する。 ・fermata の定義を学ぶ。

Grade-K では，音楽的な活動は取り入れられておらず，身体を使って空中に点や線を描くことによって“短いもの”と“長いもの”の違いを認識する学習が行われる。ここで認識した“短いもの”と“長いもの”は，Grade-1 で staccato と legato として指導される。Grade-1 では，staccato と legato を手の動きで表す活動が取り入れられている。

Grade-2 では，staccato と legato を歌や楽器で表現したり，それに合わせた動きを創作したりする活動が取り入れられる。また，新出事項として accent の定義が指導される。

上述のとおり，Grade-2 では accent に関する学習内容が含まれていたが，Grade-3 では再び staccato と legato の学習に重きがおかれる。Grade-3 においては，同じ曲を staccato と legato の両方で歌ってみて，表現に対する効果の違いを比較する活動が行われる。

Grade-4 では，staccato と legato の学習の延長として，ヴァイオリンでの slur 奏法と pizzicato 奏法が指導されるほか，Grade-2 で定義づけられた accent に関する学習が取り入れられている。ここでは，表現活動に accent を取り入れる活動が行われるほか，詩や美術作品における accent の使用に関する学習も組み込まれており，他芸術教科との関連が見られる。

Grade-5 および Grade-6 では，Grade-4 までで学習した「アーティキュレーション」に関する事項の全てを復習する活動と，それらを表現に生かす活動が多い。Grade-5 では新出事項として，slur と tie に関する指導が行われる。Grade-6 では，slur の効果や演奏方法に関する学習が行われる。

以上，「アーティキュレーション」の指導内容を概観した結果，legato と staccato については Grade-K で体験した後に Grade-1 から Grade-4 にかけて理解し，accent については Grade-2 で定義づけた後に Grade-4 で理解し，slur と tie については Grade-5 で定義づけた後に Grade-6 で理解する，という 3 つの流れが見られることがわかった。

「アーティキュレーション」の活動内容を，活動①，活動②，活動③に分類し，それぞれの占める割合を図 7 に示した。さらに，活動②の内容を身体的表現活動と音楽的表現活動とに分類し，それぞれの占める割合を図 8 に示した。

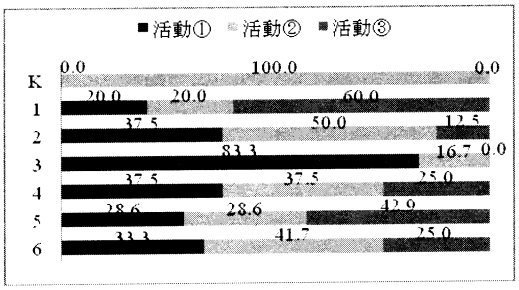

図 7 「アーティキュレーション」の活動内容における活動①，活動②，活動③の占める割合

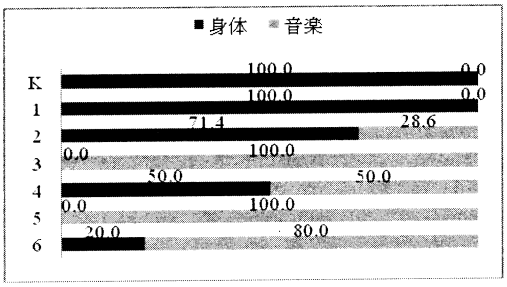

図 8 「アーティキュレーション」の活動②における身体的表現活動と音楽的表現活動の割合

Grade-K は，すべての活動が身体的表現活動にあてられており，legato と staccato を身体で表現する以外の活動は行われない。

Grade-1 では，活動③が多く見られ，legato や staccato といった用語の定義を学ぶ活動が目立つ。

Grade-2 では，活動②に重きがおかれている。さらに，Grade-1 までの活動②の内訳は 100%の割合で身体的表現活動であったが，Grade-2 からは音楽的表現活動も行われるようになる。

Grade-3 では，音楽の表現に対するアーティキュレーションの効果を聴き取る活動が多くなっている。この学年では，「アーティキュレーション」に関する活動③は見られなかった。

Grade-4 では，活動①と活動②をバランスよく用いて legato と staccato に関する学習を復習するとともに，accent に関する学習内容も含まれている。

Grade-5 では，学習したことを用いて話し合いを行う活動が多く見られる。また Grade-6 では，学習内

容を音楽表現に生かす活動が多くなっている。この2学年は，これまでの学習を復習し，定着を図っている学年であるといえる。

(4)「雰囲気」の指導内容

表 5 「雰囲気」の指導内容分類

レッスン			タイトル	①感じ取る／聴き取る	②表現する	③理解する
K	8	10／12	特別な時，特別な場所	・曲を聴き，穏やかに動くか激しく動くか決める。	・曲の雰囲気に合わせて動く。	
	9	8／12	どんちゃん騒ぎのサーカス音楽		・音楽の雰囲気を表す，様々な動きの考えを探究する。	・音楽が，サーカスの演技の手助け（気分を盛り上げる）となっていることを理解する。
	9	12／12	いろんな風に感じてみよう	・曲を聴き，そこに表されている感情を判断する。また，その理由を説明する。 ・写真の子どもたちの表情が，どんな感情を表しているのか説明する。	・曲の雰囲気に合った動きを創作する。 ・楽曲の部分ごとに，そこに表現されている感情を表すために動きを変えながら，楽曲全体に合わせて体を動かす。	

表1に示したとおり，「雰囲気」を取り上げているレッスンはGrade-Kの3レッスンのみである。したがって，この項目に関しては，学年間の比較を行うことができない。

「雰囲気」における活動内容は，楽曲の雰囲気に合わせた動きを創作する活動がほとんどである。この活動は「発想」要素の他の3項目（「強弱」，「テンポ」，「アーティキュレーション」）におけるレッスンでも随時取り入れられていることから，「雰囲気」の項目は，単独の指導内容として系統性をもたせているのではなく，他の3項目の学習をとおして「発想」要素の学習へと発展させるための補助的な役割を果たしていることが予想される。

また，「雰囲気」の活動内容を，活動①，活動②，活動③に分類し，それぞれの占める割合を図9に示す。

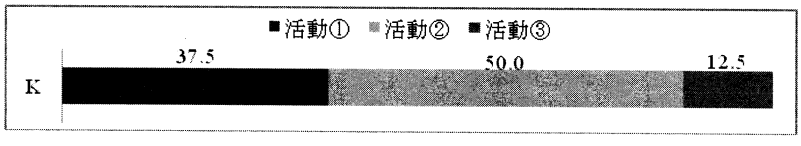

図 9 「雰囲気」の活動内容における活動①，活動②，活動③の占める割合

Grade-Kの活動内容において，活動③が見られたのはこの項目のみであった。また，活動②の内訳は100%の割合で身体的表現活動にあてられている。

Ⅳ 考察

以上，「発想」要素における各項目の指導内容を，学年をとおして概観した結果，「強弱」および「テンポ」では，A体験する，B理解する，C応用する，D定着させる・新しいことを学習する，という共通した学習の流れが見られるということが明らかになった。BおよびCの学習段階を構成する学年は，「強弱」と「テンポ」とで異なっているが，Dの学習段階は両項目ともGrade-6のみによって構成される。Dの学習段階は，それまでに学んだことを定着させるだけでなく，新出事項の学習も扱っている。また，特に「強弱」におけるBの学習段階では，“聴き取る→表現する→理解する”という流れが見られた。

「アーティキュレーション」は，「強弱」や「テンポ」に比べると学習する事項が少ないが，その代わりに学習事項の理解と定着に十分な時間をかけていることがわかる。学年が進むにつれて新しい事項が1つずつ指導され，その後継続的な指導が行われる（Grade-K，Grade-2，Grade-5で新出事項が見られる）。「学習したことを理解する」段階における“身体的表現活動→身体的表現活動＋音楽的表現活動→聴取→応

用”という細かい流れは，他の項目では見られない特徴である。また，Grade-6 で新出事項が見られなかったのは「アーティキュレーション」のみであった。

「雰囲気」は，取り扱っているレッスンが極めて少なく，Grade-K でのみ取り扱われる項目である。したがって，学年間の系統性や，学習の流れは見られない。この項目は，「発想」要素における他の項目を学習する際の補助的な役割として位置づけられていると考えられる。

また，全体をとおして，以下のようなことがいえる。

- 低学年では身体的表現活動が多く行われており，学年が上がるにつれて音楽的表現活動の占める割合が高くなる傾向にある。しかし，高学年になったからといって身体的表現活動が全く行われなくなるわけではない。低学年の身体的表現活動は，学習事項を理解するための手段として取り入れられており，高学年の身体的表現活動は，学習した事項を応用するために行われている[5]。
- 学習した事項の応用は，「学習したことを用いて話し合いを行う活動」と「学習したことを音楽表現に生かす活動」の 2 つに大別される。このうち「学習したことを用いて話し合いを行う活動」は Grade-5 に，「学習したことを音楽表現に生かす活動」は Grade-4 に多く見られる（「アーティキュレーション」の項目においては，「学習したことを音楽表現に生かす活動」は主に Grade-6 で行われる）。
- 高学年になるにつれて，それぞれの項目のみを指導するのではなく，他の項目と関連した活動が増加している。つまり，「発想」の各項目をそれぞれで定着させた後に「発想」全体としての学習に発展させようとしていることがわかる。

V　おわりに

本稿では，*Making Music* に見られる「発想」要素の指導内容を，「強弱」，「テンポ」，「アーティキュレーション」，「雰囲気」の 4 項目に分類して概観し，それぞれの項目に見られる指導内容の系統性をまとめた。その結果，これに関するいくつかの知見を得たが，本稿においては，分析の対象を「発想」要素のみに限定したため，*Making Music* 全体の指導内容およびその系統性については明らかになっていない。したがって今後は，「発想」要素以外の諸要素における指導内容に関しても分析・考察することによって，*Making Music* 全体の指導内容およびその系統性について検討することを課題とする。

注および引用

1　本間直之「アメリカの音楽教科書“Making Music Your Own”にみられる学習の系統性について－リズム指導を中心として」『音楽教育学』Vol.15，日本音楽教育学会，1985，p.97。

2　*Making Music* を出版している Pearson Scott Foresman 社は，長い歴史をもち，『全米芸術教育標準』に準拠した教科書を出版しているという特徴を有している。さらに，*Making Music* は米国内で占めるシェアも高いことから，現在のアメリカにおける代表的な教科書であるといえる。

3　要素および項目の分類は，教師用指導書の「ユニット一覧表」の記述をもとにして行った。

4　「怯えた雰囲気を出すために，decrescendo を使う」など，楽譜に書かれていない強弱を使う指導が行われる。

5　「ふさわしい強弱とテンポで詩を朗読する」など。

主要参考文献

- Beethoven, Jane et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition*, Grade-K Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
- Beethoven, Jane et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition*, Grade-1 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
- Beethoven, Jane et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition*, Grade-2 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
- Beethoven, Jane et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition*, Grade-3 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
- Beethoven, Jane et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition*, Grade-4 Teacher's Edition, Pearson Scott

Foresman, 2005.
- Beethoven, Jane et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition*, Grade-5 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
- Beethoven, Jane et al., *Silver Burdett Making Music 2008 Edition*, Grade-6 Teacher's Edition, Pearson Scott Foresman, 2005.
- Consortium of National Arts Education Associations, *National Standards For Arts Education,* Music Educators National Conference, 1994.
- 本間直之「アメリカの音楽教科書"Making Music Your Own"にみられる学習の系統性について－リズム指導を中心として」『音楽教育学』Vol.15, 日本音楽教育学会, 1985, pp.88-99。
- 曹念慈「教科書「Silver Burdett Making Music」の低学年の内容からみる諸芸術教科を統合する方法」『広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要』XVII, 2005, pp.11-19。
- 曹念慈「芸術統合カリキュラムにおける諸芸術の統合方法に関する研究－1990年代以降の台湾, 日本, 米国の小学校音楽科教育課程を中心に－」広島大学大学院教育学研究科博士論文, 2006。